

## 中神琴溪 医案①

京師小川通二條下町近江屋 与兵衛が妻 大凡 経候 月に十七八日止まず。漸に進んで、月に二三日を除き、其の余は常に経血止まず。此の如き事三年、医薬効あらずして予に請う。予 診するに脉 細数、身色は青白、起てば則ち喘し小便漏れ、巨里奔馬の如く死に垂とす。予 茵陳蒿湯を作りてこれを与う。其の夫なる者、嘗て製薬を業とせし者にて、少しく薬能を知れり。則ち予に訝り問いて曰く、荊婦の病、固より血症にして発黄の症に非ず。然るに補血・調血の剤は与えず、却て茵陳蒿湯を施さんは虚々の法にて、これが為に斃れん事必せり。願わくは其の縁故を聞かん、と。予曰く、犀角地黄・当帰膠艾の類は、前医の既に用いし所に一通りは方症対するように見ゆれども、実は其れの当に非ず。されば社、三年来此の類の剤を服して、今尚お愈えざるに非ずや。今、予が与うる所の方意は一朝一夕にして示すべき事に非ず。縦令説くとも解する事能はじ。先ず概して云わば、鬱熱を除けば血症は自ら治するの意なり、と。其の人 竟に信伏して服する事五十許日、諸症退きて常に復す。